
鉄筋の童話

青い鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄筋の童話

【Nコード】

N4753U

【作者名】

青い鴉

【あらすじ】

私は、海辺に鉄筋で童話を創る少女を見る。 pixivより転載。

ある朝の海辺でのことである。少女は、童話を創っていた。それは鉄筋とまた鉄筋から成る童話であった。海辺には巨大なオブジェが広がっていた。私には分からぬ建築学の知識を以て、少女は童話の足と胴体を創っていた。

私が再び少女を見た時、彼女はちょうど腹の部分を創っていた。

童話が食べた物を消化するのが、腹の部分の役割である。私は声を掛けて、訊いた。童話創りの調子はどうだい、と。

「順調よ」と、少女は答えた。

「けれど、鉄筋が足りないの。もっとたくさん持ってきてちょうだい」

仰せのままに。私はトラックで鉄筋屋に出向いて、鉄筋を何百本も買って戻ってきた。

一緒に居た芸術家のトキコさんが言った。

「あの童話は順調よ。でも、順調すぎると、大抵良くないことが起こるものよ」

私には何のことだか分からなかった。ともかく私は、少女に鉄筋を引き渡した。少女はオブジェの最上部に立ち、童話の首を創っていた。あとは、口を創るだけだった。

鉄筋で出来た童話は、巨大な生き物のようだった。そしてそれは、何も問題がなさそうに思えた。太陽は天頂に登り、波は寄せては返し、童話は完成しようとしていた。

「百枚を超えたわ」トキコさんが言った。

「これはもう童話では無いわ。規定をオーバーしてしまったもの」

「それは どうにかならないんですか」私は訊ねた。

あの子が推敲を望むなら、改稿を受け入れるなら、とトキコさんは答えた。

私は童話の口を創ろうとしている少女に、大声で声を掛けた。も

つと短く、柔軟にやらねばなりませんよ。なんだったら、口なんて創らなくてもいいじゃありませんか。最後までやり通すことより、まず規定に合わせることを考えないと。

しかし、少女は返事をしなかった。ただ黙々と、彼女は童話の口の部分を創っていった。

太陽が沈み始めた頃、ついに童話は完成した。夕日を浴びた童話のシルエットは、美しかった。海辺から突き立ち、きらめく無数の足、途方も無い大きさの胴体。そしてそこから天を掴むように生えた六本の手と、もたげられた首。首の先には、四方に開いた口があった。何でも飲み込んでしまいそうな口だった。その童話に、目と口というものは無い。

全てが鋼鉄製で、動くことのないその童話は、しかし私には今にも動きだしそうに見えた。童話に込められたリアリズムが、そう感じさせるのだと私は思った。

日が沈み、少女は死んだ。締切が来たのだ。そして童話は規定枚数をオーバーしていた。少女は死ぬより他になかった。残ったのは、巨大で、壮観で、美しい童話が一つだけだった。

私は鉄筋を伝ってその童話の上に登り、ハンマーを振り上げた。なにもかもを分解してしまいたい衝動に駆られた。けれども、丁寧に溶接された鉄筋は、私のハンマーを虚しく弾き返した。

「その童話を破壊することはできないわ」トキコさんが言った。

「それはもう誰のものでもないの。この先五十年間、ずっとここに、海辺にあり続けるのよ」

私は、完全な童話になれなかったそのオブジェに思いを馳せた。日が落ちて、シルエットがついに闇と溶け合ってから、私はずっと海辺のほうを眺め続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4753u/>

鉄筋の童話

2011年10月9日03時26分発行